

サヤインゲン (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。マメ科の中では根粒の着生は悪く、窒素については、生育初期から収穫後期まで肥効を保つような施肥が必要である。ただし、アンモニア態窒素を好まないため、硝酸態窒素の形で吸収可能な施肥が重要である。

〔病害虫・雑草防除〕

土壤病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植と過繁茂を避け、適切な整枝を行い風通しを良好にするように努める。育苗期には防虫ネットによる被覆等を行い、害虫の被害を回避する。病害虫の早期発見に努め、適期防除で化学農薬の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。</p> <p>肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。</p> <p>緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥 1 ~ 2 t/10a</p>
化学肥料 低減技術	<p>基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。</p> <p>肥効調節型肥料を利用する。</p> <p>有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で施肥基準以下</p> <p>有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%</p>
化学農薬 低減技術	<p>光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 生育初期に防虫ネットによる被覆を行う。</p> <p>(対象：アブラムシ類など) マルチ栽培を行う。</p> <p>(対象：雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の 20%減</p>
その他の 留意事項	<p>開花期、着莢期のかん水は、増収効果がある。</p> <p>排水良好で表土の深い肥沃な土壌を好むので、水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保を図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。</p> <p>土壌pHが酸性に傾くと生育不良となるので、pHの適正化(5.5~6.8)に心がける。</p> <p>溶脱防止、地温上昇のためマルチ栽培とする。</p>	

サヤインゲン (施設) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。また、施設では残存養分の過剰な蓄積を回避する必要がある。マメ科の中では根粒の着生は悪く、窒素については、生育初期から収穫後期まで肥効を保つような施肥が必要である。ただし、アンモニア態窒素を好まないの、硝酸態窒素の形で吸収可能な施肥が重要である。

〔病害虫・雑草防除〕

土壌病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植と過繁茂を避け、適切な整枝を行い風通しを良好にするように努める。育苗期には防虫ネットによる被覆等を行い、害虫の被害を回避する。病害虫の早期発見に努め、適期防除で化学農薬の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥 1~2t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに窒素、カリについては、追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料を利用する。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20~50%
化学農薬 低減技術	天敵農薬を利用する。 (対象:ハモグリバエ類、ハダニ類など) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:土壌病害虫、雑草など) 流動性被覆資材を利用する。 (対象:灰色かび病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象:灰色かび病、ハモグリバエ類など) 光反射マルチを利用する。 (対象:アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:アブラムシ類、ハモグリバエ類など) マルチ栽培を行う。 (対象:雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	開花期、着莢期のかん水は、増収効果がある。 排水良好で表土の深い肥沃な土壌を好むので、水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保を図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 土壌pHが酸性に傾くと生育が悪くなるので、適正pH(5.5~6.8)を心がける。 残存養分の多い圃場では、堆肥を通常量施用し、基肥量を減らした栽培に心がける。 地温上昇のためマルチ栽培とする。	